

〈調査報告〉

読谷村・古堅の動植物利用

盛口 満^{*1}
当山 昌直^{*2}

要 約

1960年代以前、琉球列島の島々には、それぞれ固有の里山環境が存在していた。その有様について、お年寄りからの聞き取りから明らかにする試みを続けている。里山における動植物利用は、古く琉球王府時代にさかのぼるものもあり、読谷村・古堅においては、そうした古くからの植物利用と考えられる、ホルトノキの実の利用について聞き取ることができた。

キーワード：動植物利用（生物文化）、里山、琉球列島

はじめに

琉球列島では、1960年代以降、身近な里山環境が大きく変化し、それ以前の様子を容易にうかがい知ることができなくなっている（盛口 2011ほか）。著者の一人、盛口は、かつての島々の里山の有様について、島々の年配の方々から、動植物利用についての聞き取りを行う中で明らかにできないかという試みを続けてきた（盛口 2019aほか）。同様、著者の一人、当山は人々の動植物利用を、生物文化と位置付け、各地で精力的な聞き取りを行ってきた（当山ほか 2016）。また、文献調査からは、琉球王府時代にさかのぼる生物文化があることや、琉球王府時代の記録にはあるものの、現在、聞き取ることができていない生物文化があることも明らかになっている（盛口 2019b）。今回、読谷村・古堅のかつての生物文化について、2019年9月1日に、昭和3年生まれの伊波寛裕さんからお話をうかがうことができた。その中に、盆行事の際のホルトノキの実の利用についての話があり、これは古くからの生物文化の一例であると考えられた。なお、聞き取りに当たっては、寛裕さんのご子息で、読谷村立博物館館長をされている伊波寛さん（昭和27年生まれ）にもご同席いただいた。加えて聞き取りには、伊波さんを紹介してくださった、琉球新報記者、黒田華さんも同席した。

1. 聞き書きの記録

盛口：黒田さんから、伊波さんが昔の動植物利用についてお詳しいという話をうかがいました。

例えば、お盆のお供えに、ホルトノキの実を飾るということを覚えておられるという話を聞いたのですが。

寛裕：ホルトノキの実はちょうど飾りに適していて。古堅では、ホルトノキの実を、パショウの

（*1 沖縄大学人文学部こども文化学科教授 *2 沖縄大学地域研究所特別研究員）

茎を切ったものに刺して、飾り付けて、仏壇に供えていました。古堅には、大変大きなホルトノキがあって、実がたくさんついたので、古堅の人たちがその家にみんな集まって、一人、二人は木に登って、枝を折って落として、みんなは自分が使う分をとって飾っていたんです。

寛：バショウの茎は、上面の真ん中を山みたいに盛り上げた形で切って、これに串に刺した実を差し込んだんです。

寛裕：このバショウの茎をポントウ小と呼んでいました。ホルトノキの実のほかに、ミーガーケーガーも刺して飾りました。ミーガーケーガーとは、タマシダの根っこにできる玉のことです。近く of 山に行くと、タマシダがあるものですから。子どもたちの採り勝負です。玉がついているかは引っこ抜かないとわかりません。

寛：那覇ではお盆のときに供えるナシカズラの実を売っていたといいますが、僕らが使ったのはタマシダの玉です。

当山：ポントウ小に飾るのはいくつですか？

寛裕：3つ、5つです。ホルトノキはターラサーと呼んでいましたが、これも飾るのは3つか5つで奇数です。数があれば5つ、なければ3つです。ターラサーというのは、葉っぱを田んぼに入れると肥料になるからと聞いていますけど、本当かはわかりません。

当山：ほかにポントウ小に飾る物がありましたか？ バンシルーの実とかは？

寛裕：バンシルーの実は、ポントウ小には飾りませんでした。ターラサーやミーガーケーガーを刺したのは竹の串です。戦前は、屋敷の囲いにはシマダケ（ホウライチク）がありましたから。これの枝をとがらして、これに刺していました。

当山：先日、同じ読谷でも長浜で聞いた話では、バショウの茎を切った物は、上面が平らだったというのですが、古堅では山のように盛り上がったものだったのですね。

寛裕：そうです。ポントウ小という名もそこからきているのかもしれません。

当山：サトウキビも供えましたか？

寛裕：供えるサトウキビは3種類あります。まず、30センチぐらいに切った物を3本あわせてたばねたものは、仏壇の両側に供えます。それから、ワイウージと呼んでいた、割ったサトウキビを束ねた物を、この横に並べました。そしてゲーサンウージという長いサトウキビも供えます。

当山：長浜では、ゲーサンウージという長いサトウキビは床の上においたようですが。

寛裕：古堅では仏壇の上にゲーサンウージを置きます。天井に届くぐらいですね。

当山：アダンの実は供えましたか？

寛裕：仏壇の上に供えました。私たちが仏壇の供えをするころには、アダンの実を採ってこれる人は古堅に何人しかいませんでした。昔はアダンの実を供えてという話はしていましたが。古堅は、アダンが近くには生えていないんです。山田（恩納）まで行けばアダンはありますが、この辺にはないので、アダンがあればなあといういながら、供える風習が無くなっていました。採ってこれるうちは供えたかもしれませんが、採って来れない家は供えませんでした。

当山：ワイウージというのが、どうもまだイメージできないのですが、これはサトウキビを縦に割った物ですか？

寛裕：そうです。長さが25センチほどのサトウキビを縦に割ってから、それを何本かあわせて

束ねます。これを、さっきいったように、30センチほどに切ったサトウキビを束ねたものの横に置くんです。意味はよくわかりません。ただ、ウークイするとき、ウチカビを燃やして、その灰を入れた器の中に、ゴーヤーやナーベラなんかの野菜の葉っぱを刻んだ物と、このワイウージをけずったものを入れました。

当山：那覇では最初からサトウキビを刻んだ物を仏壇に供えますが、その原型かもしれませんね。ワイウージは、ウークイの時に刻むんですね。

寛裕：ウチカビをもやした器の中に、ワイウージを刻んで入れて、食べ物も昆布とか豆腐とかをこれに入れて、門の所に持って行くんです。豆腐とか昆布を入れるのは、この辺では、お盆の頃は家には招かれないソーローが、道にうようよしているから、その人たちにあげるものだと言っていました。無縁仏とか、お盆のときには家に招かれないけれど、そういう人たちにあげる物だと、年寄りからは聞いています。ただ、ワイウージは、もうやっていません。4、5年前まで、それ用に、サトウキビを畑で作っていましたけれど。

当山：ニンブトゥカー（スベリヒユ）は、お盆に供えますか？

寛裕：供えません。

当山：仏壇に供える花は決まっていますか？

寛裕：うちは戦前からクロトンがありました。普通、仏壇にはフチマ（マサキ）の葉っぱを供えますが、この辺にはないので。かわりにクロトンがうちにはいっぱいあったので、それを供えました。あと、ソーローボーチ（メドハギ）を束ねて、器の中に入れて、これは仏壇の所では無くて外に置きました。これはウンケーからウークイまで置きっ放しです。ソーローボーチの茎では、お盆用のお箸も作って、供えました。

当山：メドハギの箸はソーローウメシ？

寛裕：箸には名前があったかどうか。草自体の名前がソーローボーチというので。ソーローボーチは、縁側の下の方において、ご先祖様はこれで、足を洗うと言っていました。

当山：長浜では仏壇の下にソーローボーチを置くと言う話ですが、西原も、ソーローボーチは外に置くと言う話でした。集落によって、こうしたことも、本当にいろいろ、違いがありますね。ゲーサンウージも、平安座では、長浜と同じく、床の上に置くという話です。

寛：ゲーサンウージを床に置くということはなかったですね。

当山：お盆のときに、ソーローウマを作って飾るというようなことはありましたか？

寛裕：ソーローウマ（ナナフシ）という虫はいましたが。これは盆とは関係ないんじゃないかな。ソーローが、これに乗ってくるそうだというのを、おばあは言っていました。

盛口：古堅は畑作地帯だったのでしょうか？

寛裕：このあたりは、サトウキビとイモと野菜……カボチャとかダイズとか、そうしたものを作っていました。

盛口：日常の燃料となった薪はどこから得ていたのですか？

寛裕：近くに山がありますから。若い女の人は、燃料として、松の葉っぱをクサカチャー（くまで）で集めて、よく束ねた物だと思いますが、束ねて頭にのせました。マーチバーです。これや、サトウキビの葉っぱとかを使ってイモを炊きました。シンメナービにイモを入れて、炊くんですが、マーチバーやサトウキビの枯れ葉を燃やすときはずっと見ておかないといけません。新しいマーチバーを付け足したり、中に灰がたまったら、灰をよけて風が通るようにしてあげて。台所の作りも、土間があって、そこではイモを炊きます。床のあるとこ

ろでは、料理をして。炊事に使うのは、枯れた木の枝とかを採ってきて使いました。それと、松の木は切ってはいけませんが、枝を落として、これを枯らして薪として使いました。裕福な家ではヤンバルから薪を売りにきましたから、これを買う場合もありました。荷馬車で売りにくるので、買って、軒下に積んでおく。一種の自慢のようなものにもなりました。私の家は裕福ではなかったので、そうした余裕がありません。木の枝を集めていました。木の枝を落として、枯れるのを待って置いておいて。戦前の人は、こうした薪集めに苦労したんじゃないでしょうか。うちは山をもっていました。そこで松の枝を落として薪にしました。

盛口：個人の山があったんですね。

寛裕：そうです。個人の山の松の木が、製糖時代の薪になりました。製糖工場ではなく、個人の家で黒砂糖を作っていたので。松の枝を製糖用に一カ年前に落としておいて、製糖期の薪にしました。戦前、古堅は120戸ありましたが、そのうち30戸が自分の家で製糖をして、黒糖を樽に詰めて売りました。サトウキビのまま売るより、収益が上だったと思います。裕福な家では、何人かの人を頼んで製糖をしました。集落に、製糖がうまい人が2、3人はいるので、この人に頼んで。汁を炊いて、石灰を入れて、固めて、樽に詰めて、産業組合に出すんですね。組合は比謝橋にありました。

当山：製糖用の石灰も作っていましたか？

寛裕：いいえ。比謝川のところに、ヘーヤチガマ（灰焼き窯）という、石灰を焼く窯があって、どこの人かわからないけれど、石灰を焼いて売っていました。ちょうど比謝川の石碑の下あたりのところ。川を挟んだ対岸にももう一つ、ありました。渡具知の浜から材料になる石のようなサンゴを運んできて、ここで焼いていたんです。サンゴが積まれているのを見たことがあります。テンマというボートみたいな船で運んでいました。作り方はよくわかりませんが、サンゴを燃やして、石灰を作っていると。砂糖を作るときは、これがないと固まらないんです。戦後は比謝橋のヘーヤチガマはなくなってしまって、仲泊まで、運動会のときとかには石灰を買いに行きましたよ。

盛口：サトウキビの絞りかすを干してこれを燃料にはしませんでしたか？

寛裕：サトウキビの絞りかすは、来年の製糖の燃料です。濡れないように、保管しておきました。薪のことはタムンといいます。ヤンバルから売りに来た薪はキダムンといいます。笑い話の一つありますよ。1期先輩の人が、綴り方の時間に「おばあさんが、けだものをとってきた」って書いたという話です。キダムンのことなのですが。アカサーダムンという場合もあります。正月に使う薪はソーガチダムン、お盆用の薪はシチガチダムンと言います。お盆までには枯れて燃やせるように、松を切り出してきて、ノコで切って、割って干しておくわけです。昔は、ヤンバル船が、比謝橋のところでタムンを売っていたというのを、話できました。大きな店があって、それを売っていたと思います。これはケイビン（軽便鉄道）ができるまでの話です。汽車ができるからは、いろいろなものが那覇から汽車に乗せて運ばれてくるようになりました。子どもの頃、昭和の14、15年頃、大きなヤンバル船の傍を泳いだ記憶があります。これも最初は鉄板の橋が横に回転したそうですが、私がわかるようになった頃は、上にあがるようになっていました。橋も、ヤンバル船が入ってきても帆柱が橋にあたらないように、転回橋だったんです。このあとになって、船は比謝橋まであがらなくなって、渡久地について、荷物は馬車でもってくるようになって。

当山：さっき、製糖の話になりましたが、サトウキビの汁を煮詰めているときに、子どもがイナゴをとってきて、これにつけるのが楽しみという話を聞いたことがあります。

寛裕：それはやったことがないですね。友達が、イナゴを油で揚げた物を弁当のおかずにしていて、珍しくもらって食べたことはありますね。イナゴは古堅では食べなかったのです。カタツムリはだいぶ食べましたが。カタツムリは、前の日から水に浸けてきれいにしておきます。そして、殻のまま鍋にして、チンナン汁として食べました。身も安全ピンで取って食べました。チンナンは食べられる種類が決まっています。平たいのではなくて、丸みをおびたものを食べます。

当山：カタツムリを食べるのは、どちらかと言えば貧乏人だったのでしょうか？

寛裕：ちょっと恥ずかしかった覚えがあります。それと、カイコのサナギもよく食べました。これはトーヤマーと呼んでいました。隣りに糸を取るおばさんがいて、トーヤマーを捨てるのを待っていました。うちは食べ物に飢えていたんじゃないでしょうか。夏になると、セミも焼いて食べました。これは遊びのようなものですが。

盛口：サナギをつまんで、「トーヤマーヤガ」と唱えて遊ぶという話を聞いたことがありますが、カイコのサナギをトーヤマーというのはここからきているのでしょうか？

寛裕：トーヤマーヤガ？ ヤマトヤマーヤガ？（唐はどっち？ 大和はどっち？）と、カイコのサナギでもそうやって遊んだ覚えがあります。

当山：スルルムシというのを知っていますか？

寛裕：イモの害虫です。小学校4年のころ、昭和の12、3年のころ、イモの葉っぱが一枚ものこらないというぐらい大発生したことがあります。この虫は、カイコをひとまわり、ふたまわり小さくしたような虫です。学校を休んで、この虫を退治した記憶があります。踏みつぶして歩いたんです。サトウキビは、芯に虫が入りますが、これをとって、酒に漬けて学校にもっていったことがあります。畑を回って、芯が枯れているサトウキビを見つけて、中を割いて、虫をとって、それを酒に漬けたんです。

盛口：松林があったようですが、キノコを採って食べましたか？

寛裕：キノコも食べている人がいたようですが。覚えているのは、ミミグイ（キクラゲ）です。これは松の木ではなく、何の木にも生えますね。これは食べたことがあります。しかし、キノコ類は食べるのが怖いですよ。

盛口：子どもたちはどんな木の実を食べていたでしょう？

寛裕：バンシルー、チャーギ（イヌマキ）の実をよく食べました。あと、クービ（グミ類）、イチュビ（木イチゴ類）。クワの実も食べました。ヤマモモは少なかったですね。フートー（フトモモ）は2、3本、川縁にありました。

寛：僕らはザクロも食べました。

寛裕：ヤマモモは、この辺は屋敷に1、2本あるぐらいでしたが、季節になると、山内や諸見里まで、歩いて食べに行く人もいました。昔は普天間まで歩きましたからね。しかも、裸足ですよ。普天間に拝みに行くときは、大山までは汽車で行って、そこから歩いて、拝んで、また歩いて大山まで戻って。遠足も普天間でした。4年ぐらいのときに忘れられないのは、大山から普天間に行って、戻って大山から汽車で戻るときに、大山のウーマクー（腕白）とケンカになったこともありました。そういう話だと、教科書を買に行くときの話もあります。戦前は、中部地区で、教科書を買っていたのは嘉手納の商店だけだったので、読谷か

らも歩いて買いに一端です。比謝橋を通過して嘉手納に買いに行くわけですが、当時は、学校が違ふ子どもたちが会ふと、みんなケンカです。比謝橋にはウーマクーがたくさんいて、通りかかると、石投げてきたりしましたね。

盛口：昔はシュロがありませんでしたか？

寛裕：牛を飼うにはシュロの綱じゃないとダメと言っていました。2、3本、飢えてある家もありました。シュロの皮から繊維をとって、ロープ小を作って、これでオーダー（もっこ）を作ると、最高のものができます。普通のワラで作ったオーダーはすぐにダメになりますから。僕は農林学校に行ったんですが、1年生は、馬や山羊の草刈り当番です。当番になると比謝川縁を回って草を刈るんですが、毎日、草を刈る人がいるから、草が伸びていません。うちの敷地は長方形をしています、屋敷の裏にクワの木が植えてある、クワギアタイがあったんです。そのクワの木の下に草が生えるので、当番になると、ここで草を刈りました。このとき、オーダーを水たまりにつけておくんです。オーダーは藁縄で、太いので、水につけると重くなります。草刈りのときは、2年生が草を計量するんですが、オーダーを水に浸けておくと、これで5、6斤、目方が増えるわけです。いつもこの手を使っていました。シュロのオーダーは農林学校生は使えませんでしたから。シュロのオーダーは、普通の農家じゃ買えないぐらいのものでした。

当山：アタイ小（屋敷内の畑）に植えてあったものはなんだったですか？

寛裕：ンジャナ（ホソバワダン）、チリビラー（ニラ）や、すぐに食べられるようなものです。シークワサーは、自然に生えたものが5、6本ありました。バショウもありました。

当山：ユーナ（オオハマボウ）は植えられていましたか？

寛裕：ユーナは、古堅では屋敷に植えられているところは1軒だけでした。

当山：昔はワフル（豚便所）でしたよね。落とし紙はユーナの葉では？

寛裕：ユーナは屋敷にはなくても、畑のあぜ道などに生えていました。行事のときには、ユーナの葉っぱの上に昆布とか豆腐を載せて、皿代わりにするので。お尻をふくのも紙がないので、ユーナの葉です。不思議だったのは、うちの隣りの家です。友達がいたので、まれに隣りの家でトイレにいったことあるのですが、竹をわって、ヒゴにして、これを束ねたものがおいてありました。これを適当な長さに折って、お尻をふくんです。シマダケ（ホウライチク）で作った物で、使い終わった物を入れるかごも置いてありました。

当山：シバサシの日にはススキで魔除けを作るとしていますが、どこにそれを置きますか？

寛裕：ススキは3本を結んで、門と屋敷の四隅に置きます。

当山：茅葺きだった時代は、屋根に刺したりはしませんでしたか？

寛裕：その当時の壁は、竹を編んだチヌグだったので、四隅の壁に刺しました。

当山：葬式が通るときに、門のところに結界として葉をおいたりしませんか？

寛裕：灰を撒きます。

盛口：茅葺きだったときの屋根の材料はどこから準備したのでしょうか？

寛裕：ヤンバルから注文したダキガヤ（リュウキュウチクの屋根材）です。これができるのはある程度裕福な家で、そうでないところは、サトウキビの枯れ葉で屋根を葺きました。古堅にはススキがそれほどなかったの。年中、牛や馬を養うための餌に草を刈っていたので。ススキが必要なとき、探すのは大変でした。うちはムトゥヤーですから、ダキガヤの茅葺きで、柱はチャーギを使っていました。おじい時代には裕福だったんです。それでも、

瓦は使えないので、茅葺きでした。

盛口：囲炉裏はあったのでしょうか？

寛裕：古堅にはありませんでした。大湾にはジールと呼ばれる囲炉裏がありました。

盛口：このあたりは水には不自由しなかったのでしょうか？

寛裕：この家から5～60メートル、比謝川の方へ下りていくとフルギンガー（古堅井戸）といて、どんなに干魃になっても水が枯れない井戸があります。ここから水を汲んで、かついで、家の水瓶に水を入れていました。嘉手納で水が枯れたとき、農林学校からフルギンガーまで水を汲みに来たことがあります。二つの井戸があって、手前は飲み水、奥の方はウブガーといて、男の人が水浴びもするし、子どもが生まれると、ここから水を汲んで産湯に使いました。正月の若水もフルギンガーから汲んできて、お茶をわかつて仏壇に供えました。

当山：井戸から水を汲んでくるとき、ぼちゃぼちゃと水がはねないように、木の葉とかをかぶせたりしませんでしたか？

寛裕：井戸は近かったから。ただ、豆腐ように海の塩水を汲んでくるときは、渡具知から汲んでこないといけない。このときは、サトウキビの葉を2、3枚入れて、はねないようにとしました。

盛口：古堅は海まで数キロあるということだと、遊ぶのは川だったですか？

寛裕：ちょうど、この前老人会で古堅の話をしたときの資料があります。古堅は小学校が近くにあったし、比謝橋は読谷の商店街という恵まれた場所でした。牛町もありました。中部の商店街の嘉手納も近いです。比謝川は子どもにとって、魚釣りやエビ、カニ捕りの場所でした。農林学校もあって、ここには家畜がたくさんいたので、その世話をする農夫という係が何人かいました。この人たちのほとんどが古堅出身だったんです。だから、年一回の運動会は、いろんな種目があって、子どもたちがまちかていーするものでしたが、古堅出身の農夫が多かったのも、遊びに行きやすかったんですね。駅の近くにはウァーグワーマチもありました。これは子豚を売っている市場です。女の人を買った子豚を頭に乗せて運ぶんですが、うちの親父は天秤棒で担いで運んで。ただ、2匹買うお金はないので、1匹買って、棒の片方には石をくびってバランスをとって。

当山：道はイシグーでしたか？

寛裕：それはいい方です。そんな道をみんな、裸足で歩いていました。靴は年一回しか買ってもらえませんから。ふだんははきません。はくのは行事のときだけです。戦前の中学生は地下足袋をはいていましたが、戦時中はこの質が悪くなって、底のゴムがとれてしまうんです。すると上の布のところだけが残ります。それで、アダニバーサバ（アダンの葉の草履）をはいて、紐で縛って、地下足袋の布の部分を一緒にして、そんなふうにしていました。地下足袋も年一足しか買えませんでしたから。服もクーシーカーシー（つぎはぎ）で。衣料切符が配給だったので、決まった分しか買えなかったんです。

当山：ササ（魚毒）はやりましたか？

寛裕：潮が引いたとき、ルリハコベを海まで運んで、石でつぶして入れると、潮だまりが緑色になるんです。すると、しばらくして、魚が浮いてくる。渡具知の浜に行く途中の畑でルリハコベを摘んで。

寛裕：ササに使うのは、茎の太いウフミンナーと呼ぶ物です。葉っぱの細かい方のミンナーは、

ヤギの餌にしました。ササには木の葉も使ったといいます。ハンダマグワーギー（サンゴジュ）という木で、実は空気鉄砲の弾にしました。そうそう、ヨモギは山羊汁に入れたりしますが、子どもの頃、クースキュー（キノボリトカゲ）をケンカさせて遊んでいて、トカゲがだれてくると、ヨモギをもんで頭の上に載せると元気になるといっていました。

寛：僕らはヨモギのニオイをかがせると元気になるといっていました。呼び名もクースキューではなくて、アタカーと呼んでいました。

当山：キノボリトカゲの呼び名は親子でも違っていたりしますね。

盛口：ソテツはありましたか？

寛裕：集落内にはありませんでしたが、集落のはずれにあった野原には、ソテツは一杯ありました。ソテツの葉は燃料にする人もありましたよ。ソテツの実食べよったです。二つに割って、中を取って干して。私なんかはやらなかったけれど、やっているうちはありました。

盛口：今日は長い時間、貴重なお話をお聞かせいただき、本当にありがとうございます。

2. 考察

琉球王府時代の中国からの冊封使の記録である『中山傳信録』には、悉達慈姑の名で、「実は葡萄のように、房にたわわにつき、深藍色である。（中略）食べられない」という木について説明がなされている。『中山傳信録』の訳註をおこなった原田禹雄によると、これは沖縄口のシラチグ（コバンモチ）であるとしている（原田1982, 2002）。一方、コバンモチは沖縄島南部の石灰岩地には自生していないため、冊封使が見たのは、似たような色をした実をつけるホルトノキではないかとも考えられる（盛口 2019 b）。なぜ食用にすることのないコバンモチ（またはホルトノキ）について、冊封使が記録に残したかといえ、何らかの利用がなされていたからであるだろう。この点について、植物研究家であった、故多和田真淳は、コバンモチの実が盆の際、ミョウガやナシカズラとともに仏壇に供えられる風習があり、さらに地域によってはコバンモチではなく、ホルトノキの実が利用されることがあることを書き残している（多和田1965）。ところが、これまで、著者らはこの記録以外、ホルトノキやコバンモチの利用について、直接の聞きとりができていなかった。

今回の聞き取りにもあるように、例えば同じ村内であっても、集落が異なれば、盆の供え物の種類や供え方が異なっている。つまり生物文化は、地域ごとに驚くほど多様性がある。その生物文化は時代によっても変化が見られ、特にこの数十年で、急速に忘却されつつある。今回、ホルトノキの実の利用について、直接聞き取ることができ、多和田の記述の裏付けが取れるとともに、冊封使の記録との関連性について考察する際の根拠となるあらたな記録も、得ることができた。一方、コバンモチを利用するという文化については、まだ直接の聞き取りを行えていない。そうしたことから、島々の中には、まだまだ多くの、記録に残されていない生物文化が各地に残されており、その生物文化から判明する、各地の里山の多様性の実態もあると考えられる。現在、生物文化の多様性の解明は、時間との闘いとなりつつある。今後も、さらなる聞き取りを続けていきたいと考える所存である。

引用文献

- 多和田真淳 (1965) 「林政八書の植物 4」『琉球新報』(1965 年 2 月 10 日号)
- 当山昌直・盛口満・島田隆久・宮城邦昌 (2016) 「沖縄島国頭村奥の動植物方名とその利用」『沖縄大学地域研究所彙報』第 11 号, pp.81-142
- 原田禹雄 (2002) 「“中山傳信録”の動植物」『がじゅまる通信』27 号, pp. 5-12
- 盛口満 (2011) 「植物利用からみた琉球列島の里の自然」安溪遊地・当山昌直編『奄美沖縄環境史資料集成』南方新社, pp. 335-362
- 盛口満 (2019a) 『琉球列島の里山誌』東京大学出版会
- 盛口満 (2019b) 「冊封使録に見る植物利用」『沖縄大学人文学部紀要』第 22 号, pp. 77-82

Record of useful plants and animals at Furgen, Yomitan-son, Okinawa Is.

Mitsuru MORIGUCHI
Masanao TOYAMA